

しょうか。
高橋 小児科の全体像をイメージできるように、総論的な項目を中心に構成しました。具体的には、数多い小児疾患の中から、初期研修に当たって押さえておくべき疾患を中心に記載しました。また、疾患に関する知識を整理しやすくするために、一覧表を作成しています。

一方で、基本的には医学生のための教科書でありながら、それ以外の方にも手に取っていただけるような「網羅性」を兼ね備えることにも配慮しました。小児科専門医資格を取得する際や、小児病棟の看護師さんたちが読んで役に立つ教科書にしたかったのです。つまり一冊の教科書が、医学部の授業から小児科専門研修まで、そして他職種の方々にとっても有益なものとなるように編集しました。ですから『医師国家試験準拠』という決まり文句はあえて使いませんでした。

人文・社会科学化する医療に対応するために

高橋 加えて各項目の執筆担当者には、臨床経験で得た教訓をエピソードを交えて『思い出に残るできごと』として紹介していただきました。——個々のエピソードは、個性にあふれていて興味を惹かれました。どのような思いで執筆を依頼したのでしょうか。

高橋 医療の人文・社会科学的な側面を強調するために執筆を依頼しました。実地医療においては、自然科学としての医学知識だけでなく、人文・社会科学的な素養が強く求められるようになってきました。医学部では倫理的・道徳的な観点や医師の社会的責任を学ぶための授業も広く行われています。例えばインフォームド・コンセント取得は今や当然ですが、これは自然科学の範疇ではありません。私が医師になった頃は、細胞の働き、臓器の成り立ち、治療のメカニズムといったことを知っていれば良かった。現在では、どうして治療が必要かを説明した上で、患者さんに納得してもらえるかが問われています。例えば患者さんが子どもであってもです。そこで、教科書を執筆されるようなベテランの先生方が日常診療で患者さんとどうかかわっているかが伝わるようにしたかった。自然科学の医学書にとどまらず、医学の人文・社会科学としての魅力が伝わるような書物にしたかったのです。——なぜ「人文・社会科学的な素養が

求められるようになった」と考えているのでしょうか。

高橋 医療が高度化したからです。例えば遺伝性疾患においては診断・治療行為の「倫理性」が問われています。着床前診断、出生前診断、遺伝子解析、遺伝子治療のいずれについても、いま課題になっているのは技術的な側面ばかりではありません。そうした技術を目の前の患者さんに適用して良いかどうか。適用可能だとすれば、だれがどのように説明すべきか、さまざまな視点で議論されているのです。最先端の技術を説明する医師が小児科専門医であるべきか、といったことも議論になり得ます。いずれにしても、目の前の患者さんやそのご家族にしっかり向き合うことが求められる時代になりました。

傾聴と説得による“代弁”

——小児科医をめざす若手へのメッセージをお願いします。

高橋 子どもの代弁者になる、ということを考えてみてください。一般に医療における代弁とは、社会的弱者である困難を背負っている患者さんたちの声なき声を拾い上げるという行為を意味します。しかし私は、「今ここで、目の前の子どもの代弁者になる」ということが小児科医の使命であると思っています。

——目の前の子どもの代弁者になるとは、具体的にはどうすることでしょうか。

高橋 目の前にいる子どもあるいは親御さんの真意に迫るのです。それは、「どうしたの?」「何がご心配ですか?」と声を掛けること、つまり傾聴が始まります。傾聴を通じて重要な情報を正確に聞き出す。それが診断の第一歩です。もう一つ不可欠なのが、診断・治療方針について子どもや親御さんが納得できるように説明を尽くすこと。それは重い病気の場合に限られません。「風邪だから安心して。熱冷ましを効いたらきっと元気になるよ」など、安心していただくにも説得力が必要です。

傾聴と説得。すなわち本当のことを聞き出す力と、聞き出したことを基に子どもの専門家として診断し治療方針を決め、それらを伝え返す力の総体が“代弁”という行為だと私は思います。子どもの代弁者になるのだという意気込みさえあれば、小児科医としてのキャリアはやりがいに満ちたものになるでしょう。(了)

祝点

市民データに基づいた コロナの情報発信



岸田 直樹 総合診療医・感染症医/感染コンサルタント/
一般社団法人 Sapporo Medical Academy 代表理事

厚生労働省主催の「上手な医療のかかり方アワード」は、「いのちをまもり、医療をまもる」国民プロジェクトです。医療のかかり方の改善に資する優れた取り組みの奨励・普及を図ることを目的とした表彰制度で、5つの方策が提示されています(https://kakarikata.mhlw.go.jp/)。

今回、当法人が札幌市とコロナ対策でかかわらせていただいたプロジェクトのひとつである「札幌市民データに基づいたコロナの情報発信——ワクチン効果、症状発現率とセルフケア」が第4回「上手な医療のかかり方アワード」最優秀賞(厚生労働大臣賞)を受賞しました。

◆なぜ「市民データに基づいた」情報発信が重要なのか

私たちはこれまで、札幌市のコロナの流行状況およびその特徴を、ウイルスの変化に合わせて市民メガデータをもとに提供してきました。そのデータのひとつが感染者の年代別症状頻度(註1)です。10万人近い市民メガデータから算出し、各人に合った、より具体的な症状への対応方法・準備策を提示しました(図、註2)。また、新しい技術である mRNA ワクチンの効果を、市民データからリアルタイムに算出。これらの情報を市および札幌市医師会のウェブサイトから毎週発信しました。

コロナに関連した情報に対して、市民は不安でいっぱいです。「海外の情報に本当は自分たちに当てはまるのか?」という思考は、特に日本においては起こりやすい現象です。そのような中、実際に札幌市民10万人前後のメガデータからワクチン効果や年代別症状発現率データなどを迅速に提供することは、患者・家族の不安を解消するために重要です。さらには、各地域がコロナと上手に付き合っていくため



●写真 秋元克広札幌市長への受賞報告(写真右が筆者)



オミクロンBA.5流行期における備

- ・上位5つの症状は左図のとおりです(札幌市データより)。
- ・下の表で自分の年代で出やすい症状を確認してみましょう。
- ・その症状に対処するための薬を準備しましょう。

—薬局・ドラッグストアの薬剤師や医薬品登録販売者へ相談しましょう。

年代	登録時(診断時)症状発現率				
	発熱	頭痛	喉痛	咳	鼻水
0歳未満	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
0歳～4歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
5歳～9歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
10歳～14歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
15歳～19歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
20歳～24歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
25歳～29歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
30歳～34歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
35歳～39歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
40歳～44歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
45歳～49歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
50歳～54歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
55歳～59歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
60歳～64歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
65歳～69歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
70歳～74歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
75歳～79歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
80歳～84歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
85歳～89歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
90歳～94歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
95歳～99歳	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%
合計	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%	10.0%

2022年9月20日

●図 感染者の年代別症状頻度に基づく情報発信(札幌市)

にも、「市民のデータに基づいた情報発信」が信頼の醸成や協働体制の構築につながると考えたのです。

◆「上手な医療のかかり方」を地域住民自らが考え、つくっていくために

市民データに基づいたワクチンの効果を提示した結果、ワクチン接種を円滑に推奨することができました。また、年代別症状発現率からセルフケアの準備と対応法、そして受診のタイミングの情報をわかりやすくシンプルに提示したことによって、風邪やインフルエンザに罹患した場合のセルフケアの知識の底上げにもつながったと考えています。

少子高齢化が進む今後の日本社会では、地域ごとの上手な医療のかかり方を、地域住民自らが考え、つくっていくことがますます求められます。それは、感染症の流行で危機的な状況となった医療現場の改善にもつながるでしょう。

「市民データに基づいた情報発信」が、行政と市民、医療現場の協働体制の構築につながると確信しています。

註1:本研究は北大呼吸器内科と札幌市、当法人の共同研究として、近日大手の査読付き雑誌に掲載予定。

註2:新型コロナウイルス感染症とインフルエンザの札幌市における現状の備えの詳細については、当法人のウェブサイトからダウンロードできる。
https://kicccysma.wixsite.com/smaweb

●きしだ・なおき氏/東工大中退、旭川医大卒。静岡がんセンター感染症科フェローを修了し、手稲済仁会病院総合内科・感染症科を経て2014年 Sapporo Medical Academy を設立。その後、北大 MPH, PhD コースで感染症疫学を学び(西浦研)、20年から札幌市危機管理局参与としてコロナ対策に従事。北海道科学大・東京薬科大客員教授も務め、新時代で活躍する薬剤師の育成にかかわる。

医学書院 ウェブサイトで何が出来るの?

- 医学界新聞 閲覧
- 学会情報 check
- 書籍 立ち読み

小児の特徴をふまえた感染症診療の原則、考え方、具体的なプラクティス

レジデントのための小児感染症診療マニュアル

小児の特徴(Children are not just miniature adults)をふまえた感染症診療の原則、考え方、プラクティスを明確に示し、「感染臓器とそこに感染した微生物を考える」診療を実践していくための最適な一冊。発熱へのアプローチ、感染臓器、検査、原因微生物、治療薬、予防接種の各章で、エビデンスに基づいた記載とともに臨床現場で実際に使えるマニュアルの簡明さも備えた新スタンダード!

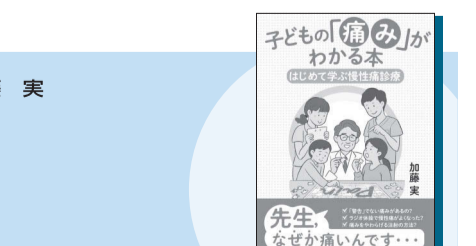


編集 齋藤昭彦

誰も教えてくれなかった、子どもならではの「痛み」の診かた・考えかた

子どもの「痛み」がわかる本

子どもは大人より痛みを感じやすい? 子どもの頃の痛みの体験がその後も影響する? 予防接種の時に痛みを減らす方法はあるの? 集学的痛みセンターで長いあいだ慢性痛診療に取り組んできた著者が伝える、子どもならではの「痛み」の診かた・考えかた。同じ「痛み」でも急性痛と慢性痛の捉え方のちがいを、診療のコツや豊富な症例を交えながら、わかりやすく解説している。巻末付録には日常臨床の疑問に答えるQ&Aもあり。



加藤 実